名勝聖跡寫眞

泰山及曲阜大觀

山東好古學會編

名勝聖蹟寫眞 泰山曲阜大觀

濟南 文海堂書店發兌

例言

一、本寫眞帖は泰山及び曲阜並びに其附近の名勝古跡を集む

二、寫眞帖の排列は一に觀察旅行の順序に依れりこれ寫眞帖を兼ねたるに案內書たらしめんとする婆心に過ぎず

三、寫眞には其體裁を損ずるをも厭はず許す限り詳細なる說明を附したり、これ亦前條の婆心に出ず

四、間々拓本及び石碑の寫眞を挿入し、徴か文獻上の參考たらしめんと期したれども其數無限なるにより或は取捨當を得ざるものあらんかを恐る

五、泰山及び靈巖に關する寫眞の說明は泰山志、岱覽、道里記、山東考古錄、長淸縣志等の書に據り、曲阜に關する寫眞の說明は曲阜縣志及び闕里文獻考に據れり

山東好古學會同人

泰山

曲阜

岱廟

泰山圖
岱廟坊
唐摠樹
漢柏樹
角樓
岱廟の無字碑
環泳亭と秦碑
峻極殿
東嶽大帝神像
封禪儀密圖
泰碑の殘缺
杜甫望泰山詩
陸機泰山吟

泰山圖

泰山は泰安驛の東北に向つて聳え頂上迄は三里餘の道程である。幅三間程の道路は處々に石段を敷き極めてよく整つてゐる。籠に乘つて行く便もある。圖は泰山志、道里記等に依て書かれた光緒年間の案內圖である

唐槐樹

塔廟坊

角樓

漢柏樹

岱廟ノ無字碑

環詠亭

東嶽大帝神像

峻極殿

封神演義圖の一部

泰山の刻石（拓本）

晉陸機泰山吟（宋拓）

岱宗坊より柏洞まで

岱宗坊
玉皇閣
老君堂
群玉庵
虬在灣
桃花澗より望泰山
一天門
孔子登臨處
萬仙樓
經石峪
經石峪其二
高山流水亭と水簾崖
金經石摺
東西橋
柏樹洞

岱　宗　坊

老君堂

玉皇閣

虬在灣

群玉庵

一天門

桃花澗より望泰山

萬仙樓

孔子登臨處

經石峪

經石峪（其ノ二）

高山流水亭ト水簾崖

經石峪金剛經石摺

柏樹洞

東西橋

廻馬嶺より南天門まで

廻馬嶺

中天門より觀望

雲歩橋

摩崖

五大夫の松

御帖崖

對山山の絶景

萬松山

南天門より脚下を望む

十八盤路より望南天門

廻馬嶺

中天門ヨリノ觀望

雲歩橋

五大夫之松

摩崖

對松山ノ絕景

御帳崖

南天門避風岩ヨリ登山路ヲ下瞰

萬　松　山

泰山頂及び後石塢

泰頂の小観
碧霞元君廟
東嶽廟
大観峯の摩崖
玉皇頂
古登封台と巓石
玉皇閣の観門
無字碑
仙人橋
後石塢の坳山峯
後石塢
後石塢其二

十八盤路及南天門ヲ望

泰頂ノ小觀

東嶽廟

碧霞元君廟

玉皇頂

大觀峯ノ摩崖

玉皇閣ノ觀門

古登封台ト巔石

仙人橋

無字碑

後石鳩

後石鳩の坳山翠

泰安附近の遺蹟

普照寺

五賢祠

醴泉と鐵塔

靈應宮

高里山より泰山を望む

文峯塔

後石塢（其二）

普照寺

龍泉と鐵塔

五賢祠

高里山ヨリ望嶽

靈應宮

靈巖寺

- 靈巖山景
- 靈巖勝境
- 阿彌陀尊像
- 摩頂松及千佛殿
- 同　其二
- 四十羅漢及千佛像
- 辟支塔
- 卓錫泉から千佛殿を見る
- 宋朱濟道靈巖寺詩
- 大雄殿、鐵袈裟
- 蘇轍靈巖寺詩
- 李北海靈巖寺碑

文峯塔

靈巖山景

靈巖寺

阿彌陀尊像

靈巖勝境坊

四十羅漢像（其ノ二）

摩頂松及千佛殿

辟支塔

四十羅漢像ト千佛像

宋朱濟道靈巖詩

卓錫泉から漢柏千佛殿

題靈巖寺　眉陽蘇軾

蘇軾の題靈巖寺

鐵袈裟

大雄殿

孔子林

李北海靈巖寺碑

至聖先師孔子林圖

萬古長春坊

神道及文津橋

至聖林觀樓

至聖林坊

享殿前

洙水橋

子貢手植楷

享殿

沂水侯墓

歷代皇帝駐蹕亭

至聖孔子墓

泗水侯墓

孔子廟

孔子廟圖
闕里
金聲玉振門
太和元氣門
至聖坊
神橋と弘道門
同文門内の漢碑
魯王泮池刻石
魯相乙瑛碑
明孔子廟碑
奎文閣
歴代皇帝の碑亭
杏壇
蟠龍の陽刻
大成殿
大成殿の石柱
先師孔子神位
寢殿
聖蹟殿
孔子像
崇聖殿
孔子故宅の井
魯壁
唐槐及宋果樹

子貢守墓廬

至聖先師孔子廟圖

金聲玉振門

闕里

至聖坊

太和元氣門

同文門内の漢碑

神橋と弘道門

東漢魯相乙瑛請置孔子廟百石卒史碑（拓本）

西漢魯王泮池刻石（拓本）

奎文閣

明朝孔子廟の碑

杏壇

歴代皇帝の碑亭

大成殿

石段蟠龍の陽刻

聖蹟殿内の一部

寢殿

大成殿の石柱

先師孔子神位

魯壁

孔子故宅の井

顏子廟

復聖廟門

廟內と卓石

陋巷井

虎皮松

復聖殿

復聖顏子神位

唐槐樹及宋銀杏樹

復聖廟門

陋巷井

顔子廟内之卓石

復聖殿

曲阜附近の遺蹟

古泮池
周公廟櫺星門
周公廟
文憲王周公神位
少昊陵
少昊陵寶頂
八卦石
曲阜舊縣城壁跡と萬人愁碑
萬人愁碑の龜趺
顏氏侍郎林墓

復聖顏子神位

周公廟

周公廟の櫺星門

少昊陵

文憲王周公神位

八卦石

少昊陵寶頂

曲阜舊縣城壁址と萬人愁碑

萬人愁碑の龜趺

岱廟

1 泰山圖

泰山は泰安驛の東北に向つて聳え頂上迄は三里餘の道程である、幅三間程の道路は處々に石段を敷き極めてよく整つてゐる、籠に乘つて行く便もある、圖は泰山縣志道里記等に依つて畫かれた光緒年間の案内圖である。

2 岱廟坊

岱廟の正門にして飛龍唐獅子の陽刻をほどこし、泰山坊門の内で最も美的なものである、門に面して遙參亭がある、凡そ廟に詣でる者は先づ此の亭に入り遙拜して後ち廟に入るによつて名づけらる。

3 唐槐樹

廟の西南隅、延禧殿前にある、土壁を以て圍ひ旁に明の廿一驥の書いた唐槐の碑が立つてゐる、槐樹は支那には澤山あるが日本では餘りない樹である。

4 漢柏樹

唐槐と相對して東南隅にある、古は六株の柏樹があつて共に漢の武帝の時植えたものと傳へられてゐる、側らに清高宗の漢柏圖碑がある。

5 角樓

岱廟はその周圍三支里あり、高さ三丈餘の雉堞（ひめがき）を繞らし、巽艮乾坤の四隅には各々同じ角樓を設けてある、壁上は可成廣く繞りわたる

顏兵侍郞林墓

ことが出來る。

6　岱廟の無字碑

高さ二丈餘の石幢八面共に剝蝕して何も書いてない、天貺殿碑と稱し亦俗に秦の無字碑と呼んでゐる、可成古いものであるらしい。

7　環詠亭

四方の壁面には晉の陸機、王羲之、魏の重子其他歴代登岱者の刻石が澤山嵌めてある、荒廢した亭前に秦碑の殘缺が保存されてあるが珍しい遺物である。

8　峻極殿

卽ち岱廟の正殿である、殿は九間奥行き六間、黄瓦を以て葺き、内に東嶽泰山の神を祀つてある、尙岱廟内には乾隆三十六年に賜つた長さ三尺寛さ八寸碧色にして上に乾隆年間製の四文字を刻してある玉圭や其他漢鏡等多くの寶物を藏してある。

9　東嶽大帝の神像

峻極殿中に安置する高さ二丈に及ぶ巨大な塑像で赤い帷幔には金字で東嶽大帝と記されてある、一に泰山府君とも云ひ、漢代以後に起つた信仰で人死すれば神魂泰山に歸すとせられ、支那各地の山上に東嶽廟を祀るは此の神を分祠したものである。

10　封禪儀の壁畫

峻極殿内の三壁に書きある古の封禪儀畫の一部である、泰山は岱嶽とも云ひ岱は代謝の義で易姓の天子は泰山に封禪の儀を行ひ以て天

の功に報じた、畫は宋代の作と云はるゝ極彩色の密畫で封禪の盛儀を想像することが出來る。

11　秦碑の殘缺

始皇は天下に行幸して秦の功德を頌する碑を六個建て、二世皇帝又旁らに詔書を刻し、共にその書は李斯の筆と傳へられてゐる、泰山の刻石は始め其の頂上にあつたが、後碧霞祠に移し乾隆五年の火災に散佚し目下僅かに其の二片が岱廟の環詠亭に特別に保存されてある、泰山遺物の最古の物とせらる。

12　杜甫望泰山詩

岱宗夫如何　齊魯青未了
造化鍾神秀　陰陽割昏曉
盪胸生層雲　決眥入歸鳥
會當凌絕頂　一覽衆山小

13　晉陸機泰山吟

泰山一何高　迢々造天庭
峻極周已遠　層雲鬱冥々
梁甫無有館　蒿里無有亭
幽龕延萬鬼　神房集百靈
長吟泰山側　慷慨激楚聲

岱宗坊から柏洞迄

岱宗坊

岱廟を東北すること數町にして此の坊に達する、(坊とは日本の鳥居に等しきもの) 明の隆慶間の創建で後雍正八年更に重建されたものである、登岱の一歩はこれより始まる。

14 玉皇閣

此の地は白鶴泉と稱する泉の故道で今はその跡は絶え玉皇大帝が祀られ尙仙人洞と稱する洞があつて中に淸の康熙二十五年に脫化した孫と云ふ仙人の木乃伊が祀つてある。

15 老君堂

廟庭に宋代の銀杏樹一株と外に鴛鴦碑と稱する二基の立石を合せて一基とした碑がある、碑面には細字が上蓋に到る迄刻されてある、廟內には老子の像を祀り道德仙宗の額を揭げてある。

16 群玉庵

西王母を祀り、王母池と一般に云ふてゐる、唐の呂洞賓や宋の麗歸蒙等の道士が錬丹の處と稱せられ、境內に樹木繁り幽邃な處で後世小蓬萊の名を以て呼ばれてゐる。

17 虬在灣

群玉菴の北にある、昔時呂祖が岩壁に詩を題した時龍來つて頂拜した一夕呂祖復た來つて筆を揮ひ、其の額に點すると遂ち龍に化して飛び去つた因て飛虬灣と稱せられ、其の西に呂祖洞がある。

18 桃花澗から望岱嶽

一名桃源峪とも云ふ、三四月頃谷間に花開き恰も武陵の桃源に遊ぶの觀あるより得た名で此の邊から遙か碧空の間に岱頂南天門を望むことが出來る。

19 一天門

傍らに盤路起工處の碑がある如く道はこれから所謂盤路に入る現在の門は康熙五十六年巡撫李樹德の重建にかゝる。

20 孔子登臨處

一天門に接した一坊で孔子登臨處の題刻は明の羅洪先の筆である此の附近を紅門街と云ひ紅門坊が近くにある。

21 萬仙樓

望仙樓とも稱し樓上に西王母が祀つてある、此の邊柏樹多く水石の間に潺湲の音を聞き風景掬すべきである。

22 徑石峪

宋の陳國瑞は石經と題名し、明人は經台峪と稱し、隷體の金剛經が廣さ畝餘の巖面に刻されてある、過半磨滅して現存してゐるは九百餘字に過ぎないが其雄渾古樸な書體は泰山磨崖中の偉觀である。

23 徑石峪其二

石刻に署名年代がないので何人の筆なるかは確證するを得ないが泰山道里記の著者聶劒光が北齊の王子椿の書にして對嶺徂徠山にある般若經の刻石と其の字體の一致を說いてから此の刻石同も一人の筆

と推定されてゐる。

24 高山流水亭と水簾崖

石經の傍らにあり、明の隆慶六年兵部侍郎萬恭の建てたものである、其の右側に水簾崖といふ小瀑があり同じく萬恭の筆で水簾の刻字がある竝んで漱石　聽泉等の刻字がある。

25 金剛經石摺

經石峪に刻してある文字は一字を一紙毎に拓して聯句に組合せて拓本屋で販賣してゐるが此處で好む文字を拓させることも出來る、最近碩儒康南海經石峪に到りその磨滅を恐れ鐵柵を設けて其保存を計られんとしてゐる。

26 東 西 橋

古名を登仙橋と云ひ山水畫に相應しい景勝の處である、路はこれより谿流の右側に轉ずる。

27 柏 樹 洞

東西橋を過ぎ壺天閣に達する數町の間は柏樹繁り道路を覆ふてゐる中途に柏洞と刻した石がある。

廻馬嶺より南天門迄

28 廻 馬 嶺

これより路は三十九度の急峻な石段で日本の馬返しに當る、古人は此處を天關亦は石關と稱し宗の眞宗は廻馬處と命じ登山の一難所である。

29 中天門よりの觀望

廻馬嶺からの急坂を登り盡すと中天門に達する、眺望急に開けて泰山及び南天門は明らかに望まれる、山腹に見ゆる白き摩崖は乾隆帝御製の朝陽洞詩を勒した萬丈碑である。

30 摩 崖

中天門から此の邊に達する三支里の間は快活三里と云ふ平道で大小無數の刻石が目につく、中には一字で丈餘に及ぶ大きなものあり名筆名句の展覽場たるの觀がある。

31 雲 歩 橋

雲花橋と云ひ或は楡木橋とも云ひ、飛瀑巖より落つる水の上に架けられた木造丹塗の美しい橋である、右側に酌泉亭といふ石亭があり此の邊は泰山山水の絶景といふべき處である。

32 御 帳 崖

飛瀑巖亦は百丈崖と稱し崖上の平面は御帖坪と云ひ宋の眞宗が大中祥符元年封禪を行つた時の駐蹕故址と傳へられ今尚ほ柱を建てたといふ礎の跡が岩に殘つてゐる。

33 五大夫の松

秦の始皇帝が東方郡縣をめぐつて魯の諸儒生と山川を望祭する事を議し泰山に登り石を建て祠祀して下り途中で風雨に會ひ大樹の下に雨をしのぎ其の樹を封じて五大夫の宮爵をさずけたと史記に記されてある現存の松は無論當時のものではなく二三百年前の者である。

34 萬 松 山

對松山とも云ひ登山路を夾んだ双峯の巖石には幾千株の松が生えてゐる皆な蛟虬の如き形ちをなし四邊の風景雄大である。

35 對松山の絶景

古人の詩に『鬱々たる巖間の松終古丈に盈たず其の旁らに發木なし其下に片壞なし』とあるが眞にその通りで片壞なく發木なき蒼崖奇巖の間に聳えてゐる松の姿は偉觀である。

36 十八盤路及南天門を望

左は飛龍巖右は翔鳳嶺と云ふ泰山登山路の最難所で南天門から十八盤路の石段が梯子を懸けたように垂下してゐる、此の邊より松樹も絶え泰山の巖々たる氣象を現はし來り南天門は目睫にせまつてゐるが容易に達せられない。

37 南天門避風岩より登山路を下瞰す

南天門の左方避風岩上に立つて下瞰すれば延々として谷に添ふた登山路を登つて來る豆の樣な人々より對松山、五大夫松、中天門はては遠く泰安城汶水徂徠など迄遙かに雲煙の間に望むことが出來る。

泰山頂及び後石塢

38 泰山の小観

1 碧霞元君廟　5 青帝宮
2 孔子廟　6 大観峯摩崖
3 東嶽廟　7 無字碑
4 碧霞元君寢殿　8 玉皇閣

39 碧霞元君廟

俗に泰山娘々(ニャンニャン)と稱せられ支那到る所の山上に分祠され民間に深い信仰を持つてゐる女神である一に東嶽大帝の女と稱せられ宋の眞宗が泰山を封じ手を池内に滌ぎ水面より石人の玉女を得祠を建て天仙玉女碧霞元君に封じたと傳へらる、春秋の農閑時に登岱者の多いのは一に此の廟あるに依る。

40 東 嶽 廟

泰山の上廟で東嶽大帝を祀る、東嶽大帝は亦泰山府君ともいひ天帝の孫世界人民の官職生死貴賤等の事を掌ると稱せられてゐるが、しかし其信仰は到底碧霞元君の盛なるに及ばない。

41 大観峯の摩崖

東嶽廟の北にある。一に彌高巖と曰ひ唐の玄宗帝が開元十四年登岱の折刻せる泰山銘の摩崖がある高さ二丈九尺寛さ一丈六尺、全文一千四百餘字四寸平方の隸書で筆力雄渾泰山摩崖中の雄である、崖の西に淸康熙乾隆二帝の題詠がある。

42 玉皇頂

舊名を太平頂と云ひ玉帝觀があつて玉皇帝を祀つてある現在の廟は明の成化十九年に內帑を以て重建したもので南天門から六支里泰山の絶頂である東にある迎旭亭は眺望絶佳旭日を迎ふるによい。

43 古登封台と巓石

玉皇閣庭前の中央にある一に絶頂石亦は巓石と云ひ古泰山に封祭するは神靈に近づくを願ふ意より更に土石を積んで壇をなした此石は即ちそれで明の萬恭が隆慶六年に發掘したものと云ふ石の側に古登封台と刻した碑がある。

44 玉皇閣の觀門

閣の觀門で門の前に無字碑の上蓋が見える此の近く東に「巍々蕩々」「孔子小天下處」などの碑や日觀峯の立石がある。

45 無字碑

高さ一丈五尺幅三尺六寸厚さ二尺四寸の花崗岩で碑の上に蓋があるのみ碑面には何も刻してない石の下には封禪の文が函してあるとも金書玉簡があるとも云はれてゐる、一般に秦の無字碑と稱せられてゐるが顧炎武は漢の武帝の立石であると辨じてゐる。

46 仙人橋

數十丈の巖壁の間に三個の大石が架けてある其危險仙人でなければ渡ることが出來ないと云ふ所より名づけられ其の東は愛身崖と稱し三面削つた樣な絶壁で古來より往々冥福を求むる迷信から投身する者があるので明の巡撫何起鳴が垣を作つて近づくを禁じ今尚は投身禁止の告示がしてある。

47 後石塢の拗山峰

泰頂の北方空明山の山腹にある悉く絶壁を以て圍まれ「羣山突起、古松萬株、廟在天空」の古人の形容は景勝を描寫し得てゐる。

48 後石塢

世に碧霞元君鍊丹の地と稱せられ元君廟があり亦元君の墓と稱するものがある、後石塢には後石屋の意とも或は南天門の側道から十五支里あるから後十五とも名づくと曰はれ塵外幽寂の一仙境である。

49 後石塢其二

境內には黃花洞、靈異泉、萬松亭など見るべき所が多い古人が「泰山に遊んで黃華に遊ばざれば遊ばざるに如かず」と云つた如く佳境去るに忍びない心地がする。

50 普照寺

唐宋時代の古刹である金の大定間重建して普照禪林と云ひ明の永樂年間に朝鮮僧滿空禪師が此の寺に留錫した寺の西南に滿空禪師塔がある山を負ひ幽邃な所である。

51 五賢祠

投書澗とも云ふ宋初の大儒孫復、石介、胡瑗、講學の處と傳へられ前記三賢の外に明の宋繹田、清の趙仁甫の二人を合祀してある、祠の門外には「胡安定投書處」と云ふ立石がある胡瑗が家信を得て上に平安の二字あれば復た展讀しなかつた處と稱せらるる。

52 醴泉と鐵塔

宋の眞宗大中祥符元年六月泰山の麓に醴泉湧き同月醴泉の北林木の上に天書が下つた眞宗天書を大廟に告げ冬十月玉輅に之を載せて先導とし遂に泰山に封禪を行つた醴泉及び天書觀は其遺跡で醴泉の二字は明人の筆側の十三級の鐵塔は同嘉靖十二年の建造である。

53 靈應宮

碧霞元君下廟とも云ひ高里山の麓にある、明萬歷中の勅建で廟內には森羅殿を中心に七十五司の塑像を安置しある境內には萬古芳流と刻した碑が林立し鐵佛對覽亭など見る可き所甚だ多い。

54 文峯塔

高里山上にある七層の塔である史記封禪書に「十二月甲午朔上親ら高里に禪し后土を祀る」とあり、武帝禪壇の遺跡である高里は蒿里とも書し古挽歌に「人死すれば魂蒿里に歸す」とあるより後世帝王の禪壇は閻王の祠に變じ靈應宮に七十二司の閻羅像を奉安するに至つた。

55 高里山より望嶽

高里山上に立つてはるかに泰山を望めば萬古渝らざる秀嶺は群山を率ひて聳え立つ、近くの洋館は泰安驛及び其附屬の建物である。

靈巖寺

56　靈巖勝境

陽公山下の路に跨つた一坊で乾隆二十六年の建立である、これより以東靈巖に達する十支里の間は靈巖寺の寺領である明孔山・滴水涯等の奇勝は目睫の間にある。

57　靈巖山景

靈巖は古方山と稱した、そは山頂方形なるより名づけられたものである、泰山の西北三十餘支里　晉の朗公禪師が此山畔に踞して說法せられた時巖石其の威靈に感じ點頭したりと云ふより後靈巖の名を以て呼ばれる、寺は後魏の法定禪師の開基にかゝり八大寺四小院に分れ四十餘の僧房がある

58　摩頂松と千佛殿

傳えて曰ふ唐の玄奘三藏西域に出發する際靈巖庭前の松の頂きを摩し呪して「我れ西に佛經を求めんとす汝の枝西に長ずべし我れ歸り來らば東に向ふべし」と云つたが樹枝果して玄奘の言ふ如くになりしと、碑は清の高宗御筆で其の右は五花殿の故趾、左は千佛殿である。

59　阿彌陀尊像

千佛殿の正面にある尊像で金碧燦然たるものである、千佛殿は唐僧慧宗の建立で宋代に擴張し大雄寶殿と呼び靈巖の大殿である、殿内には有名な羅漢像と千佛像がある亦內庭の右に梁啓超の題靈巖宋羅漢造海内第一名塑の碑が立つて居る。

60　羅漢像一

殿内の左右に置かれた五百羅漢の像であるもとは千餘體あつたと云ふことであるが現在は四十餘に過ぎない何れも神態生動し海内第一名塑の言も誇張ではない。

61　羅漢像二

羅漢像は宋の徽宗帝の宣和年間に齊古と云ふ人が非常な苦心を經て閩中にて之を造り山河幾百里を運んで來たものである。

62　辟支塔

塔は九層より成り高さ八丈少しく南に傾いてゐる塔の中に階段があつて登ることが出來る、建立の年代は明らかでないが泰山志に載せてある唐碑の文に據れば昔慧頤禪師と云ふもの刻苦して淨財を集め此の塔を作つたとあれば唐朝以前のものなることは確かである。

63　卓錫泉及び漢柏

千佛殿の東墻外に柏樹一株天を摩して聳えてゐる柏の旁に明の萬曆三十六年長清知縣王之士の立てた漢柏紀の三大字を刻した碑がある漢の文皇靈左に千柏ありと夢み鄧通に命じ往きて見せしめし所唯一株の柏が芽を出してゐた文帝その復命によつて此の山と共に不朽なるべしと禱られたと云ふ異談が傳へられてゐる、此の東墻の外壁には宋の朱濟道、蘇東坡其他の詩が嵌められてある、西に清泉を以て知られた卓錫泉の跡があり清乾隆帝の卓錫泉の詩が刻してある。

64　朱濟道靈巖寺詩

此寫眞は原石を寫したものである、二詩に曰ふ

二年催遺向東州　見盡東州水石幽
不把尋常費心眼　靈巖消得少遲留
右一

東州山水亦堪遊　及至靈巖分外幽
會有定師能指示　直須行到寶峯頭
右二

65　大雄殿及鐵袈裟

大雄殿は宋代の獻殿五花殿の前堂である殿前には大きな銀杏が影をなして茂つてゐる。

鐵袈裟は高さ五尺あまりの袈裟の形をした鐵が地面より突出してゐる法定禪師が靈巖を開いた時地から湧出したもの或は達磨が道成つて袈裟を此處に捨て後ちに化したものとも云ひ傳へられてゐる。

66　蘇轍詩

寺内土地廟の外壁に嵌せられてある、此の題詠の謂れは詩刻の旁記に明らかである。

67　李北海靈寺碑頌

唐の李邕の靈巖碑は辟支塔の下魯班洞窟内の壁中に嵌せられてある碑は既に中斷されてゐるが上方の二十一行は完全である、因みに魯班洞は春秋時代の魯班の墓とも或は朗公の墓とも傳へられてゐる。

孔子林

68　至聖先師孔子林圖

孔林の圖である、孔林は又至聖林と稱せられ、其門樓林墻は古魯城の上林に在つて始は其の區域も小なりしが東漢永壽二年相韓勑孔子墓を修めしより其制漸く備りて以後歷代の增拓を經て周圍の墻壁十餘支里四十萬坪の大森林となり、孔家一族の墳墓がある。

69　神道及文津橋

神道とは墓路と稱する坦々たる一路孔子の墳塋に通じ兩側には數百年の柏樹が茂つてゐる、その中間にある石橋を文津橋と云ふ。

70　萬古長春坊

至聖林の南にある明の萬曆二十二年に建てられたもので左右に碑亭があるやはり明代の建立である。

71　至聖林坊

坊の左右は林前村と呼ばれる、孔子死して魯の城北泗上に葬つた、弟子皆三年の喪に服し、心喪終つて或は訣れ或は復た留まつた史記に「弟子及び魯へ往きて家に從ひて家する者百有餘室因て命けて孔里と曰ふ」とある孔里は即ち此處である。

72　至聖林觀樓

即ち林牆門で其左右より高さ丈餘厚さ五尺の林墻が孔林を圍んでゐる、門の上には觀樓があつて孔林一圓を見渡すことが出來る。

73 洙水橋

橋下の川は玉帶河と稱し洙水ではない、洙水は泗水の支流で史記に『孔子敎を泗洙の上に設け詩書禮樂を修む』とあり、橋名は單に其古事を偲ぶに過ぎない、講學の遺蹟泗洙書院は城の東北にある。

74 享殿前の甬通

通道とは天子行啓の道の兩側に墻を設け、一般人に天子の通行を見せしめない樣にしたるを云ふ、尙享殿は東漢永壽元年の建立と傳へられてゐる。

75 享殿及び翁仲

孔子の享殿である、殿前に石鼎があり、甬通の兩側には翁仲が立つてゐる、翁仲とは秦の阮翁中のことで身長一丈五尺の偉丈夫死して後ち銅を鑄て其像を造り咸陽宮の司馬門外に置きしを匈奴此の像を見て恐れしと傳へられ、以後此の像を墓前享殿前に建てる習慣となつた。

76 子貢手植の楷

孔子死したる時諸國の弟子各々其國の珍樹を持ち來つて此處に植えた、此れは當時子貢が植えた楷と傳えられ高さ四丈周圍丈餘既に枯れてゐるがなほ朽ちずに保存されてゐる、向つて左は楷で亭中に楷圖碑がある。

77 駐蹕亭

向つて右は淸の高宗の駐蹕亭で、その左は淸の聖祖のそれで、次に宋眞宗帝の駐蹕亭がある、何れも皇帝孔子墓參拜の時駐蹕せられた處である。

78 沂水侯墓

孔子の孫子思子の墓である、墓前には宋の宣和年間に立てた二體の巨大な翁仲がある、子思子の封號は宋の徽宗崇寧元年春二月勅して沂水侯に封じたるに始まり沂國述聖の封號は元の文宗至順元年七月の加封にかゝる。

79 泗水侯墓

孔子の子鯉字は伯魚の墓である、年五十孔子より先つて歿した其爵封に就ては宋の哲宗元祐元年以後さまざまに議せられたが遂に徽宗帝崇寧元年春泗水侯に追封せられたのである。

80 至聖孔子墓

家の高さ一丈五尺南北五丈東西六丈五尺馬鬣の如しと舊記にあるが今は其形舊記と異り稍圓形をなしてゐる、墓碑には「大成至聖文宣王墓」の八字が篆書で刻されてある、此謚號は元の武宗即位の秋に追封されたものである、至聖孔子永眠の所と思へば欽慕低徊去るに忍びない。

81 子貢盧墓處

孔子の墓の西側に一小廬がある、その前に子貢盧墓處と刻した立石がある、史記に「弟子皆服すること三年、三年の心喪畢り相訣れて去らんとし則ち哭し各々復た哀しみを盡し、或は復た留まる、唯子

貢のみ家上に廬すること凡そ六年」とあるは即ち此處であると傳へられてゐる。

孔子廟

82 孔子廟圖

縣城中の稍西に編在する孔子廟の圖である史記索隱に「孔子魯の陬邑昌平鄉の闕里に居る」と稱する孔子の故宅で孔子卒するの翌年魯の哀公廟と爲つて之を祀り以後歷代の增修を經清の雍正二年六月火災に罹り大いに修築を加へ竣工し廣袤二萬九千六百有餘坪の大兆域となつた。

83 闕里坊

闕里坊は聖廟の東南仰高門外の闕里街に在る、闕とは種々異說あれども二台を門外に設け樓觀を上に作り中央は闕して道をなすものを云ひ魯に二石闕あり其下を闕里と稱し孔子の宅此處に在りしと傳へらる。

84 金聲玉振門

孔廟の墻壁外に在る廟の正門である、金聲玉振とは孟子萬章篇に「孔子は之を集めて大成すと謂ふ、集めて大成すとは金聲べて玉之を振むるなり」といふ語より取つた名である。

85 大和元氣門

金聲玉振の次に櫺星があり、此れは第三門に當る、其東に總倅天地坊が在り西に道貫古今坊がある。

86 至聖坊

大和元氣門の次にある石坊で、これを過ぐれば壁水橋に達する。

87 壁水橋と弘道門

壁水橋は弘道門前に三座相竝んで架けられてある、其前には漢柏唐槐の大樹が鬱蒼と繁り神さびた趣を添えてゐる。

88 同文門内の六朝碑

同文門の左右兩側に漢魏隨唐時代の有名な古碑が保存されてある、その中五鳳石で瑛碑孔謙碣、孔君墓碣、泰山都尉孔宙、魯相史晨饗孔子廟碑、孔彪碑、孔褒碑竝に魏代の孔羨碑、張猛碑等は廣く世に知られてゐる、珍らしいものである。

89 漢五鳳石刻

同文門の西柵中にある有名な漢碑で、碑に五鳳二年とあるは西漢宣帝の年號で宣帝より三代前の景帝の第五子劉餘を魯に封じ世に魯の太子と呼ばれたが碑文にある魯三十四年六月四日成とは餘の孫孝王の時に當る。

90 乙瑛百卒史碑

乙瑛字は仲郷魯相と爲り孔麟廉と共に朝に請ひ後漢桓帝の時孔子廟に百石卒史を置き廟中の禮器を掌ることゝなつた、碑は同文門内に在て一に百戸碑と云ひ後漢鐘繇の書にして其の百石卒史を置きし顛末を詳記してある、漢碑の最も完全のものとして有名である。

91 明朝孔子廟碑

明の憲宗の重修孔子廟の碑である、明の成化三年四月聖廟の重修成り御製の文を憲宗に請ひ山東巡撫原傑、詔を奉じて地を相し同四年に始めて此處に碑を建てたのである。

92 奎文閣

閣の名は金の明昌五年章宗の命名したもので亦奎文閣の榜額は淸の高宗の筆である、高さ七丈四尺、廣さ九丈四尺、深さ五丈六尺、三層の樓閣で賜書寶墨を藏す、(亦閣内に日本、本鄕大將秋山長官の贈られた大花瓶一對と月樹の銀額がある)。

93 歷代皇帝碑亭

大成門と奎文閣の間に黃瑠璃瓦の二層樓が十三棟相い並んでゐる、歷代帝王の碑亭で、亭中には何れも巨大な龜趺の上には帝王の文を刻した丈餘の石碑を立てられ、一基の碑亭に數十萬圓を要したと稱せられてゐる。

94 杏壇

大成殿露臺の前に在る朱欄の美しい兩層の樓で莊子漁父の篇に「孔子緇帷の林に遊び杏壇の上に休坐す弟子書を讀み孔子弦歌して琴を皷す」とあるは即ち此處と傳へらる、宋の眞宗の時に孔道輔が壇を造り杏樹を樹え杏壇と名づけた、閣中に在る杏壇の刻石は黨懷英の筆である。

95 石段蟠龍の陽刻

大成殿の石階左右十二級中央に蟠龍の彫刻を施してある、何人の作か不明であるが顏子廟の石柱は元代の作で其彫刻の蟠龍が一手に出でしが如き觀あるよりやはり元代の作であらふ、刀技精巧を極め雲起り今にも飛翔せんかと思はれる。

96 大成殿

大成殿即ち孔子の廟である、大成殿の名は宋の徽宗崇寧元年の勅命である、其制高さ七丈八尺六寸、廣さ十四丈二尺六寸、深さ八丈四尺黃瑠璃瓦にて葺き周圍に石欄を廻らし金碧燦爛其建築の雄大と其結構の美は我日光を凌いでゐる、殿の榜額は淸の世宗の筆である。

97 大成殿の石柱

大成殿の周圍は總て石柱を以て支へられてゐる、特に前簷の十本の石柱は周圍凡そ八尺何れも雲龍の浮彫を施してある、其入神の技は到底他に見ることは出來ない。

98 至聖先師孔子像

大成殿内に奉安せられた孔子の尊像である、高さ一丈餘鎭圭を執り十二旒の冕を冠し十二章の服を着け端嚴壯重思はず人をして跪拜せしめる、なほ神主にある至聖先師孔子の謚號は明の世宗嘉靖二十七年に贈られたものである。

99 寢殿

大成殿の後にあり孔子夫人亓官氏の神主を奉祀し、高さ六丈四尺、

廣さ九丈五尺、深さ五丈、八角の大石柱には美しい花鳥が彫刻されてある。

100 聖蹟殿の一部

寢殿の後ろにある、殿内の正面に淸高宗書の萬世師表の巨大な刻石がある、其の奥に聖蹟百二十圖を刻した石や亦晉の顧愷之、唐の吳道子、宋の米芾等の筆になる孔子像の刻石があり皆な硝子板を嵌めて大切に保存されてある。

101 孔子像 拓本

吳道子筆の孔子像の拓本である、吳道子筆の聖像は他にも數種あるが、こは就中大きいもので世に知られてゐる。

102 崇聖殿

大成殿の東にある、孔子五世の祖を祀る中央に肇聖王、左に裕聖王昌聖王、右に詒聖王、啓聖王、の神主が奉安され、東西の階下には孔子世系碑が二基立つてゐる。

103 孔子故井

孔子故宅中に在りし井と傳へられてゐる、その旁らに淸の乾隆帝の故井の詩の刻石がある。

疏食飲之　曲肱樂之　既淸且渫　汲綆到玆
我取一勺　以飲以思　嗚呼宣聖　實我之師

104 魯壁

秦の始皇帝が狹書の禁を出したその三十四年孔鮒及び弟騰は孔子故宅の土壁に古文經傳を藏し嵩山に隱れた、そののち漢の劉餘が舊宅を壞し其の壁中から先きに藏した經傳を得たと傳へられてゐる、今でも高さ二間餘りの土塀が殘され魯壁の碑が側に立つてゐる。

105 詩禮堂前の唐摠、宋杏樹

聖廟の東詩禮堂の庭にある、唐摠は高さ四丈餘周圍一丈餘何れも根柯蟠結し老ひて益々繁るの慨を示す、詩禮堂は孔子の故室でもと孔子の衣冠車服禮器等を藏してあつたと云ふ。

顏子廟

106 復聖廟門

復聖顏子廟は孔子廟を去る東北七八町の所にある、相傳へて陋巷の舊跡と言はれてゐる、四圍に長さ三百十二丈の墻垣を廻らし內に顏子廟と共に十九座の廟がある、寫眞は廟正門の石坊である。

107 廟內と卓石

廟內には古い柏樹が繁り林中に卓石特立と稱せらるゝ奇石がある、清の乾隆四十一年に鄆城知縣侯元龍が修工して此の名を命じた。

108 陋巷井

論語雍世篇に「子曰く賢なるかな回や、一簞の食一瓢の飲、陋巷に在り人其憂に堪えず、回や其の樂を改めず」とあるその陋巷にあつた井と傳へられ井は亭を以て覆はれてある。

109 虎皮松

退省堂の後にある、灰白色の樹皮に虎皮に似た斑點があるより名づけられ高さ七丈餘太さ三圍程の百日紅に似た樹である、七八尺の所から幹が十數本に別れ頗る奇態を呈してゐる。

110 復聖廟

元の成宗元貞間に始めて廟を建て明の成化正德中又重修して擴張した、高さ四丈九尺、廣さ十一丈一尺、深さ六丈七尺綠瑠璃瓦を以て

葺き殿前の石柱には盤龍を刻し旁ら及び後簷の石柱には花を刻し其の構造大成殿に以て只異なるは規模の小さいばかりである。

111 復聖顏子神位

復聖廟の中に祀れる顏子の塑像である、神像の謹嚴は生けるが如く人にせまる、神主復聖の封號は元の文宗顏子を封じて袞國復聖公としたるに始まる、廟の東西の兩廡には左に顏歆顏子推、顏眞卿、顏杲卿、右に顏儉、顏見遠、顏師古、顏衎紹、等聖裔の神主が祀られてある。

曲阜附近の遺蹟

112 古泮池

泮宮は古諸侯の學宮で半圓形に水を以てめぐらすを云ふ、ここの泮宮は詩經魯頌に「思(ここ)に泮水を樂んで薄(しば)らく其の芹(せり)を采(と)る」と詠じられた所で明の孔宏緒の別墅となりて南池と名づけ、清の乾隆中衍聖公其址に行宮を作り、皇帝の東巡を迎へた、池水清く一勝地である。

113 周公廟櫺星門

周公廟の正門である、櫺星門は孔子廟にもある、櫺は靈に通じ、封禪書に郡國縣をして靈星祠を立てしめよとあり、靈星は農事を司る神で周公廟とは關係ない、或は門形の窗櫺に似たるにより名づくとも云ふ。

114 周公廟

廟は曲阜城の東北一支里餘の丘上にある、論語八佾編に「子大廟に入りて事每に問ふ」とある、所謂大廟の故址である、正殿に周公の像を安置し東に周禮堂がある、周圍の墻垣の長さ三百八十八丈、清の康熙二十四年翰林院五經博士を設け世々周公の祀に奉ぜしむることにした。

115 文憲王周公像

廟の正殿中に安置されてある、文憲王の追號は宋の眞宗大中祥符元

年曲阜に幸し廟を新たにして周公を追封して文憲王となした。

116 少　昊　陵

少昊陵は曲阜城の東北八支里の處にある、乾隆二年知縣孔毓琚が陵前に宮門三間享殿五間東西配殿各三間及び門外に少昊陵の三字を刻した坊を建てた、後ち知縣孔傳拂磚瓦を以て周圍二百餘丈の土塀に易之、檜柏を植え、更に亦神龕を修め乾隆帝御筆の少昊金天氏神位の木主を奉安した。

117 少昊陵の寶頂

少昊廟の後ろにある、室頂は廣さ八丈九尺、高さ二丈、頂の廣さ方二丈一尺、宋の時石を疊んで之を飾り上の石室には石像が安置されてある。

118 白石(八卦石)

少昊陵前大道の南に在る、白石は曲阜になく恐らく宋の眞宗は符瑞を喜び盛んに土木を興せしより此の白石も亦當時萊州より運搬されたものであらうと傳へられ或は伏羲氏が八卦を畫す所とも稱せられ俗に八卦石の名を以て呼ばれてゐる。

119 曲阜舊縣城壁趾と萬人愁碑

曲阜縣志に據れば宋の眞宗大中禪五年曲阜を改めて仙源縣となし治を壽邱に移したとある、即ち舊縣城はそれで寫眞は其の城壁及び護

城河の跡である、現在の縣城は明の嘉靖元年に移つたものである、なほ壽邱は黄帝の生地虞舜の什器を作りし地と傳へられてゐる。

120 萬人愁碑の龜趺

前寫眞と同一の場所にある巨大な石碑が打ち碎かれて地上に横つてゐる、相傳えて宋の眞宗巨碑を立てんとしたが民其の命に堪えずして止めたとも、或は金人之を作り元兵至つて完成しなかつたとも傳へられる、碑に文字なく萬人愁碑と呼ばれる、縣志に據れば乾隆十三年高宗東巡の時悉く之を打碎いたといふ。

121 顔子侍郎林

顔氏の墓には兩塋ある、村民は何れも皆顔子林と呼んでゐるが顔回の墓は縣城を去る二十餘支里の處にある、これは顔子侍郎林と稱し城東北五支里の所にあり、北齊周以後の顔氏の裔を葬れる處である、その南に顔子村がある。

大正十三年六月二十日印刷
大正十三年六月廿五日發行

編輯者　山東省濟南府商埠　山東好古學會
發行者　山東省濟南府商埠　宮島登芽尾
印刷者　東京市麹町區有樂町三ノ一　葛西虎次郎
印刷所　東京市丸の內數寄屋橋畔　株式會社青雲堂印刷所
發行所　支那山東省濟南府商埠　文海堂書店